

# 【ねがいましては】

平成19年9月25日

KYOWA SCHOOL

第203号

「殻」

子どもたちにとって学校は社会そのものです。自分以外の人たちと一緒に生活することというのはこういうものなのだ、というショーの幕開けです。それぞれが味わう学校。いろいろな感情が彼らの心に焼き付いていきます。

当然何が良くて何が悪いことなのかということも、周りを見ながら観察しながらの判断になって行きます。極端なことを言うと、例えば物を渡すときは『投げる』とクラスの全員が行っているとしめます。始めてその光景を見た子は「えっ」と思うに違いありません。でも全員がそうしていると、「たぶんここはそういうところなのだ。」と思ってしまいます。で、結局その子も投げるようになります。そのようなことを皮切りに、自分の周りがどのようにになっているのかを見、真似をすることで学校の中に順応していくのです。

とんでもないことなのです。自分の意思をかき消して周りに歩調を合わせることは、やがてたとえ周りの子どもたちがこれでいいのかなあというような行動をとっていても、「そのうち誰かがやってくれるだろうな。」などという他人転嫁の感情を引き起こしてしまいます。すべてに消極的な感情を起こすようになってしまいます。わたしはこの感情は学校でついでに『学校病』のひとつだと考えています。『やまい』なので、かかっているにもかかわらずそのままだけの状態が多くなります。これがあたりまえだー。

今年のキャンプ、例年必ず1人や2人いるはずのムードメーカー的存在の子、リーダー的存在の子がいません。したがって、誰かがそのうちやってくれるだろう。誰かがそのうち言うてくれるだろう。といった他力本願的なムードが漂います。これはすなわち、自分から行動をおこすという心がないということになります。その心のスタートとなる基本があいさつです。

キャンプ4日目、明日は帰らなければならない最終の晩ご飯『カレー』です。今まで3日間子どもたちの手で作っていた夕食は、この日だけは先生の手による人気ナンバーワンのメニューです。贅沢に豚バラのかたまりを大きめに切って使います。時間をかけ煮込んだカレーに包まれて、肉は舌の上で何の力を加えなくても溶けていきます。

その日、カレーを作り終えた私はキャンプ場オーナーのところへ行き、見せたかったスライドを見てもらっていました。その間、最終日には全員がシャワーを浴びることになっていましたので、ちょうど良い時間でもありました。やがて、一番年下の今年初めて参加した2年生の女の子を先頭に、ぞろぞろと集団がやってきました。「ねえ、先生カレーまだ・・・。」私は心がかーっと熱くなるのを感じました。なぜこの子なんだ・・・。情けなさで全身から力がなくなっていました。

バンガローへたどり着くと、各建物の前にあるテーブルはまったく食器などの準備はされておらず、私は啞然としました。期待していたのが悪いのかもしれませんが、「先生、全員シャワー終わりました。」くらいの報告はほしかったのです。「なあ、全員集めてくれる・・・。」私は、この子たちに何を伝えてきたのだろう・・・。

「なあ、お前ら、そのうち誰かがやってくれるだろうっていう逃げの気持ちばかりになっていないか・・・。このキャンプでいったい何を学んだ・・・。こころだろ・・・。今から2つのこと言うから、どっちが人らしいか決めてくれる・・・。1つ目、自分だけよければいいって思いながら生きること・・・、2つ目、自分のとなりにいる人に心をくばって生きること・・・。さあどっち・・・、1つ目だと思う人・・・(シーン)・・・2つ目だと思う人・・・(そーっと全員手があがる)・・・お前ら人間じゃないじゃん・・・お前たち人間失格じゃん・・・なあ、ちっちゃな勇気・・・ちっちゃな勇気もとうよ・・・。あまりにも自分勝手だよ・・・。この栗田の口からいつも出ている言葉、小さな勇気、何もないじゃん・・・。生きるってどういうことなの・・・。助け合って生きること、それとも自分だけが生きること、どっちが人らしい・・・。

最初、あと、・・・。なぜこころが逃げてゆくのか・・・。それじゃ、学校と一緒にじゃないか、学校でいつも見られるちくちくとしたいじめの瞬間、君たち見てるだろ・・・。でも見て見ぬふりしてそのまま・・・。学校の先生もそのまま・・・。そんな世の中でいいの・・・。ここにいるみんなが小さな勇気もとうよ・・・。そしてとなりにいる子の心の中、いつも覗いてあげなよ・・・。そしてさ、ここにいる全員の中にあるあったかいものを配るんだよ・・・。となりの人に「どうぞ」って、まいにちまいにち、そうやって生きるの・・・。なあ、そうしたらさ、ここにいるみんながそうやって毎日生きたらさ、みんなの周りの人たちも、きっとそれを見てだんだん広がって、やがてこの地球の人たち全員がそうやって生きていけたらさ、「いじめ」・・・なくなるだろ・・・。なあ、そのトレーニングしようよ・・・。練習しようよ・・・。で、でね。あしたキャンプから帰ったら、君たちの家の人たち全員に、君たちにとって一番大切な人たち全員に「こころ」くばってあげなよ・・・。たのむからさ・・・。」

もうあらすじなどすっかり忘れてしまっていますが、このようなことを訴えていたように思います。奥のほうを見るとスタッフの高校生が泣いています。後ろを見るとOLのMさんが泣いています。そのとなりのFさんもギリギリ耐えています。いやっ、ちょっとやりすぎたかな。これはまずい。などとちょっぴり思いながらお話は終わりました。でも、その時見せてくれたきれいな涙に・・・ありがとう。